幸福なモスクワ

池　田　嘉　郎

西洋史の池田です。私は20世紀ロシア史を専門としており、もともとは1917年の革命とその直後のソヴィエト政権の初期について研究していました。いまは対象とする時間の幅を前後に少し広げて、第一次世界大戦期について、またスターリン時代についても、論文を書いています。

今日は、私はスターリン時代に対象を絞って、話をしようと思います。具体的には、1930年代のモスクワ改造について、話をします。タイトルにある「幸福なモスクワ」とは何なのかについては、あとであらためて触れたいと思います。

私は博士論文では革命期のモスクワについて書いたのですが、スターリン時代のモスクワについては一般的なイメージしかありませんでした。それが、スターリン時代のモスクワについて調べるきっかけとなったのは、2005年に東京大学出版会の企画で都市史の論文集を出すことになり（注７の論文集）、それに声をかけていただいたことでした。折角なので、それまでやってきた革命期とは違う時代を選ぼうと思い、スターリン時代のモスクワをそこでのテーマとしたのです。はじめは国内にある当時の文献を探すところから手をつけました。たとえば北海道大学スラブ研究センターには大衆向けの地元紙『夕刊モスクワ』のマイクロフィルムがあります。**図版１**を見ていただければその雰囲気が伝わるかと思います。また経堂にある旧日ソ図書館（現在は日本ロシア語情報図書館）には、1930年代に朝日新聞モスクワ特派員であった丸山政男が寄贈した、モスクワのガイドブックや都市計画に関する論文集が所蔵されています。そのような史料を読み進めるうちに、私はじきに、1930年代にスターリンのもとで行なわれたモスクワ改造が、革命研究者の観点からも、大変に興味深いテーマであるということに気づきました。それは単なる都市管理の観点からなされたものではなく、スターリンの、そしてボリシェヴィキの理想社会像がきわめて明瞭に投影された、ユートピア的企図であったのです。

従来モスクワ改造については、主に建築史・芸術史の観点から、議論がなされてきました。そこでの視角は、1920年代に花開いたアヴァンギャルド的建築計画・都市計画が、スターリンの独裁体制の確立、思想統制の確立とともに段々活動の範囲を狭められていく、独創的な才能をもった優れた建築家の計画にかわって、体制好みの保守的で権威的な建築・都市計画が勝利を収める、というものでした。しかしながら、1930年代のモスクワ改造に関する史料を虚心坦懐に読めば分かるのですが、そこで起こっていたことは決してそれほど単純なものではありませんでした。というのは、スターリンには彼自身の独自のユートピア像があったからであり、なおかつそれは、兵営によって象徴されるような統制国家的なヴィジョンであるとも限りませんでした。むしろ、スターリンとその幹部たちは、モスクワ改造を進めながら、革命初期のコミューン国家の理想を参照さえしていたのです。モスクワ改造の基本方針を定めた1931年６月の共産党中央委員会総会において、当時首都党組織のトップであったカガノーヴィチは次のよ

うに言いました。「生活習慣の社会主義的再編は、われわれがレーニンのスローガン『すべての炊事婦が国家を運営できるようにならねばならない』の実現に着手したとき、女性が社会的・ソヴィエト的活動に広範に参入し始めたときに開始された。子供の家・託児所・遊び場・クラブの組織化、学校の再編、これらはすべて文化革命の一続きの鎖、古い人間のつくりかえと新しい人間の創出の一続きの鎖の環なのである」[1]。

あらたな関心をもって史料集めを進め、ロシアに出張した際にも、革命期や第一次大戦期のアーカイヴ史料と並行して、1930年代のモスクワについても史料を収集しました。ひとたび興味をもってみると、ありがたいことに、現在のモスクワもが、これまで見えなかった相貌を見せてくれるようになります。現在のモスクワは、基本的にはスターリンの首都改造によってつくられたものです。当時つくられた建築物はいまでもその多くが現役です。1920年代のアヴァンギャルド建築の青写真も魅力的ですが（**図版２**）、資金上、また構造上の理由から、実現できたものはそう多くはありませんでした。それに対してスターリン時代の建築群、それはより保守的で権威的とされる建築家たちによってつくられたもので、たしかにセンスにおいてはアヴァンギャルドほどの先鋭性はないかもしれませんが、そこにも十分に豊かな個性を感じることができます。それに、何といっても実現したことの強みは否定しようがありません。今でもその前に立てば、それぞれの建物の物語を体感することができるのです（**図版３**）。

1930年代のモスクワ改造において具体的に行なわれたことはどのようなことだったのかといえば、それは総合的な都市計画に沿っての、主要な通りの拡張と延伸、巨大な居住用ビルの建設（**図版４**）、地下鉄の開通、ヴォルガ河と首都をつなぐ運河の開設（**図版５**）、橋のかけかえ、河岸の散歩道としての整備（**図版６**）、公園の整備と増築、などといったことです。多くの写真や図版の入ったアルバムが刊行されました（なお、モスクワ大学（**図版７**）ほか７つの高層建築は第二次世界大戦後につくられました）。それはモスクワの全体にささげられたものだけではなく、公園や河岸などの個別の主題に関してもです。今それを見てみると、革命期の混乱や1920年代の図面上の実験が終わり、土木技術が、装飾上の古典回帰を伴って、安定的な発展の時期を迎えたことがうかがえます（**図版８**）。

これらの多様な事業に関わるモスクワ改造において打ち出されていたユートピア像とはどのようなものだったのでしょうか。先に私は革命初期のコミューン国家像が参照されていると言いましたが、このコミューン国家自体、いくつかの異なるイメージが革命期において提示されていました。一方ではレーニンが『国家と革命』の中で社会主義国家を巨大な郵便局にたとえていますが、これは各部分が合理的・機能的につくられた、人工的な構造のイメージです[2]。他方、それとは異なるイメージもあります。それは、同じレーニンが言った「各工場委員会は、自分を（…）全国家生活の調整のための組織的な細胞とも感じなければならない」というものや、ソヴィエト政権初期におけるモスクワ市のトップであったカーメネフが言った「人々が互いに狼ではなく同志となり、仲のよい家族として生活するような未来の体制」というような、全体が一つの有機的な共同体であるようなイメージです[3]。

スターリンの時代のモスクワ改造において主調音をなすのは、このうち後者、有機的な共同

体としてのユートピア像です。政権のレトリックによれば、モスクワ改造の中で生まれるべきコミューン国家は、優れて家族的な共同体でなければなりませんでした。1934年７月、地下鉄建設とモスクワ都市計画に関する演説の中で、スターリンの副官であったカガノーヴィチは次のように述べています。「本日、モスクワ市ソヴィエトと諸工場のアクチフ〔積極分子〕、それにモスクワ地下鉄建設局のアクチフが会議に集まっている。われわれは一体であり、われわれは一つの家族である」。モスクワ改造を支える集団をこうして「家族」と呼んだのち、カガノーヴィチはさらに述べています。「だが、同志諸君、この一体性、われわれ全員の一致をもって、われわれが自己批判を隠蔽するなどということがないようにしよう」。このようにモスクワ改造の中で生まれる共同体は、家族として一体でありながら、同時にまた、相互の浄化をも怠ってはならないものとされました[(4)]。

この相互浄化の要請が生み出す内的な緊張についてはあとで立ち返るとして、今はもう少し、有機的共同体のユートピア像について見てみましょう。この像は「家族」からさらに発展して、独特なイメージを生み出すことになります。それは、生きているモスクワ、という形象です。たとえば1932年のロージンのパンフレット『明日のモスクワ』には次のようにあります。「この素晴らしい夕日を見たまえ！モスクワを照らす夕日の美しさといったら――深紅の都市！これが石と煉瓦の単なる死んだ塊には、とても見えない。むしろ生きているオーガニズムだ。その鼓動を僕は感じているような気がする」[(5)]。なお、スターリン時代のものを含むロージンのモスクワに関するエッセイや案内文は、2011年に『モスクワを旅しよう！』という題名で656頁の分厚い本として刊行されました[(6)]。このことは、現代のモスクワっ子がスターリン時代またソ連時代に対して関心を高めていることの反映であるといえます。

生きているモスクワについての事例をさらに挙げると、1935年に刊行された論集『モスクワ』にも、次のような文章が見られます。「こんにちは、ホテルよ！旅人たちの家、君に挨拶します…力強いゴールキーパーのように、君は社会主義計画によって生まれた〔モホヴァヤ〕通りをみずから切り開いている」。「私の通りの若返った血流が、いかに強くしなやかに脈打っているか感じられるようだ」。「モスクワは若返っている。広く輝く通りがモスクワに初めて現れている。名称もまた新しい」[(7)]。

今挙げた文章で「こんにちは、ホテルよ！」と呼びかけられているのは、当時首都の中心部に建設中であったホテル・モスクワです（**図版９**）。これは老朽化のために2004年に撤去されましたが、同じ外装のままに再建されました（**図版10**）。今日のモスクワは、スターリンが破壊した救世主キリスト大聖堂と、スターリンが建てたホテル・モスクワがともに再建された姿で立ち並び、さらには21世紀的な高層ビルもが副都心に林立する（**図版11**）、いくつもの時代や歴史意識が並行する空間となっています。

生きているモスクワという有機的な形象が見られることについては、建築史家であるパペルヌイも、その著書『文化２』の中で指摘しています[(8)]。私はこの著作から大いにインスピレーションを得ました。ですが、パペルヌイは、「生命」や「豊穣」といった要素がスターリン時代の文化を特徴づけるとして、文化史的な観点から、現象面について鋭い指摘をしている一方

で、私が革命期のコミューン国家論との連続性に注目するような、歴史的な観点から議論を行なっているわけではありません。もちろん今日私が挙げている事例は、全て私のオリジナルです。

この生きているモスクワという像に、最も明確な形象を与えた事例として、二人の芸術家の作品を挙げることができます。一つはメドヴェトキンの映画『新しいモスクワ』（1938）です。主人公の技術者は、自ら成長する「モスクワの生きた模型」（**図版12**）を開発し、その実演会を行ないます。拡張されるトヴェリ通りなどの記録映像と、河岸に林立する巨大建築やソヴィエト宮殿などの特撮映像を組み合わせることで、メドヴェトキンは生きているモスクワの像を描き出すことに成功しています。もう一つは、プラトーノフが1932年から36年にかけて執筆した未完成の中編小説で、今日の話のタイトルにした『幸福なモスクワ』です。こちらのモスクワは実は都市ではなく、ヒロインの名前です。これは本名ではなく、革命後に孤児となった主人公が与えられた名前です。スターリンの社会主義ユートピアを全面的に信奉し、飛行士として躍動するヒロインの形象は、生命あるものとしてのモスクワそのものです。

メドヴェトキンとプラトーノフは、芸術家としての資質においてよく似ています。二人はともにスターリンのもとで進む社会主義建設のユートピアを全的に信奉し、その結果として二人の作品はともに、グロテスクな理想像をアイロニー抜きで描き出すことになっています。メドヴェトキンの描く近未来の奇妙で威圧的な巨大建築群や、プラトーノフの主人公たちが抱える自己否定に近い空虚感がそうです。恋仲になった男性を拒絶して、モスクワはこう言います。「愛はコムニズムにはならない。私は何度も何度も考えて分かったんだ。そうはならないってことが……愛することはしなきゃならないことかもしれない。だからこれからも愛することはあるよ。食事をとるのと同じで――でも、それは必要だというだけのことで、一番大事な人生ではない」[9]。こうしたことが理由になっているのかどうかははっきりしないのですが、メドヴェトキンの「新しいモスクワ」もプラトーノフの「幸福なモスクワ」もともにソ連末期まで封印された作品となりました。

しかしながら、封印されたからといって、それらの作品が時代の精神を共有していなかったということにはなりません。逆に、新しい文明の生命力がそこに脈打っていたことは明らかです。そして、繰り返しになりますが、生きているモスクワということが、その新しい文明、ユートピアの重要な一部をなしていたということになります。

ユーラシアの心臓部で進んでいたユートピアの創出を、他の国の人々はどのように見ていたのでしょうか。日本での状況をごく簡単に見ておきましょう。最もストレートな反応は、社会主義体制における都市改造の利点に注目する都市行政の担当者の間に見られました。当時、東京市文書課長であった磯村英一は、ナポレオン三世のパリ改造が私有財産制という障害に悩み、関東大震災後の東京復興計画でも巨額の土地代価を支払ったのに対して、「然るに社会主義都市計画に於ける大なる利益は、此の私有財産問題に拘束されることは全然ないのである」と記しています[10]。ユートピアの創出という観点からは、どうでしょうか。横光利一は特派員として1936年のベルリン・オリンピックを観戦した帰路に、ソ連を、そしてモスクワを目に

しています。「伝統に論理を持たなかったということも、モスコウと東京とはまた似ている。伝統に論理のない限りは何をどこから取り入れようと遠慮は不用だ。自国の文化をヨーロッパと均等にする必要も警戒もまた不用である。やるからには、それ以上にしなければ新興の意義はない」という文明比較も興味深いのですが、それよりも、まだモスクワを目にする前、ソ連国境を越えてすぐのときの感想「あたりの風景は、太古の森林地帯にいきなり近代科学の流れ込んだ突飛さだ。その中で落ち着き払っている人人の様子は、も早再び家へは戻れぬピクニックの光景である」が、復路なき旅路としての新天地建設の一面が巧みに捉えられているように思います[11]。

もう一例、1920年代に人間の生活と自然の融合を目指す「山林都市」を唱えた黒谷了太郎が、1933年に「『露国の都市計画』と其の批判」という論文を書いています。黒谷は次のようにソ連の都市計画を批判しています。「婦人を駆つて生産労働に向はしめると云ふのは人間の幸福を忘れた生産万能主義の間違で、今に修正さるべき時代が来るであらうと思はれる。されば私は現代露国の都市計画に現はれてゐるところの共同住宅計画や托児所の普及計画こそは過渡的計画で今に本然に帰るべき運命を持つてゐるものと睨らんでゐる」。この予想と裏腹にソ連で女性労働が後退することはありませんでした。ですが、モスクワ改造で「家族」理念が重視されたことや、さらにスターリンのもとで家族強化政策がとられるようになることを考えると、黒谷の洞察にはソ連の現実と呼応する面もありました。黒谷はさらに、満洲でも「所謂産業主義的都市計画ではなく、露国式都市計画でもなく、王道主義即ち厚生主義の都市計画」を採るべきだと主張しています。モスクワ改造においても1937年頃から「人間への配慮」がスローガンとなります。そうであれば、黒谷の「山林都市」や満洲での「王道主義」と、スターリンのモスクワ改造には、有機的な共同体のモチーフにおいてやはり共有される面があったといえるように思います[12]。

モスクワ改造それ自体は十分な技術的準備もなしに急ピッチで進められましたから、実際には様々な問題が生じることになりました。それらの問題は、大テロルの時期である1937年 -38年に、敵の手になる破壊工作として説明されることになります。家族としてのモスクワというイメージが伴っていた相互浄化の要請が、ここにおいて一挙にテロルを作動させるバネとなります。1938年５月 - ６月に開かれたモスクワの党全市協議会が、そのための舞台となりました[13]。アーカイヴ文書に基づいてその内容を見てみると、たとえば道路工事部門の責任者であるイヴァノフは、前任者による道路工事の欠陥を逐一指摘し、それを全て破壊工作であるとしました。「モスクワっ子は覚えている、1936年、敵が実践した作業のせいで、クルスク駅が市中心部から切り離されてしまったことを。ゼムリャノイ・ヴァールからの全敷地が掘り返されてしまったのである。／諸君はまた間違いなく覚えているだろう、モスクワの中心部が周辺地区から切り離されてしまったことを。カルーガ通りが全て掘り返されてしまったため、乗り物でも、歩いてでも、そこを渡ることが不可能になったのである」。

モスクワ改造の目玉であった地下鉄も、混乱に満ちていました。新任の地下鉄局長ノヴィコフによれば、ショートやケーブルの絶縁がたびたび生じ、エスカレーターのベルトの逆回転も

「ときに非常に頻繁に起こった」といいます。車両の駆動部分の大量破損や、信号の誤作動も見られました。これらの混乱も全て、破壊工作によるものだったといわれました。

「敵の手」になる破壊工作という説明を、誰もが本気で信じていたかどうかは疑わしいものがあります。しかしながら、自分たちの内部にいたものが実は敵であったということからくる恐怖感が、強く感じられていたこともたしかです。モスクワ市のある地区の責任者であるアニケーエヴァによれば、運輸機械製作総局では「46人が外国、様々な国とのつながりをもっていたし、その際、幾人かはある一国とつながりをもっていただけではなく、様々な国に親族をもっていたのである」。また彼女によれば、ボリショイ劇場では「三つのスパイ組織が暴露された」。そこでは「1400人中500人が、かつての貴族、搾取階級の出身者、僧侶、将校――なんだっている」というのでした。

スパイや敵を摘発しなければいけないという気分の高まりの中で、党幹部のシキリャートフは言います。革命期からの党員であるある技術者が、近年、若い党員ばかりが優遇されているといって党中央委員会に不満を書き送った。「こうした密かな不満は存在するのだ。そして、これら全てが声を押し殺してなされるとき、それは常に真実ではない。なぜならば真実は常に公然と口に出されるものであり、真実でないものは常にひっそりと研がれるからだ（…）。この書簡をわれわれは精査する。そこには腐敗が感じられる」。内面を隠さず、全てを公然とさらけ出さねばならない。これが「新しいモスクワ」のユートピアに生きる新しい人間の条件でした。

こうして、スターリンのもとで1930年代に進められたモスクワ改造は、当時刊行された美しいアルバムとは裏腹に、様々な欠陥や問題点を抱えていました。十分な装備や機械なしに進められた工事は、多くの死者や負傷者を出しましたし、その中には強制労働に使役された囚人――その大半は無実――も数多くおりました。事故はそれ自体がスパイ恐怖症を煽るもととなり、大テロルを下から支えました。

しかし、その一方で、破壊工作という考え方は、モスクワ改造に敵との闘争という英雄的物語の文脈をあらたに提供したことも否定できません。また、少なからぬモスクワ市民は、テロルに恐怖を感じながらも、同時にまた、新しい社会の創造に参加することに喜びを感じてもいました。1938年の全市党協議会では、破壊工作の事例ばかりではなく、前年1937年12月に行なわれた、スターリン憲法制定後初の最高会議選挙がモスクワ市でどのように進んだのかについての報告もなされました。市党委員会書記のブラタノフスキーは当日の様子を次のように伝えました。「モスクワの選挙は全国においてと同様、実際、全人民的祭日へと変わったのだ（…）。モロトフ地区の第21選挙分区ではシチューキン一家16人が、アコーディオンを手に歌を歌いながら隊列を組んで現れた」。また、投票用紙を入れるための封筒には、無記名で、いくつもの手紙が封入されていたといいます。その内容は、スターリンを讃えるものでした。「君に投票するよ、わが親愛なる同志スターリン」「長生きされんことを、われらの親愛なる同志スターリン」「自分の票を最良のうちの最良の人、偉大で賢明なるヨシフ・ヴィサリオノヴィチ・スターリンに投じます」等々。「全人民的祭日」というブラタノフスキーの言葉は、全くの虚偽

でもなかったように見えます。

あらためてまとめるならば、スターリンのもとで改造の進むモスクワは、家族、そして生きた共同体としてのユートピア的な像と分かち難く結びついていました。生きている、そしてそれゆえ痛みをも伴う肉体が、スターリンのモスクワだったのです。『幸福なモスクワ』の孤独なヒロインは、飛行士の仕事を捨てたあと、地下鉄工事現場で働く労働者になりますが、ある日事故で右足を失う大怪我をします。木製の義足をつけた彼女は、未完の原稿の終盤では劇中からも姿を消してしまいます。この、幸福なモスクワのユートピア、そしてスターリン時代のユートピアの全体像を解明することが、私のロシア史研究の大きな課題なのです。ご清聴ありがとうございました。

註

（1） 池田嘉郎「スターリンのモスクワ改造」『現代都市類型の創出（年報都市史研究 16)』2009 年 2 月、38-39 頁。

（2） レーニン（菊地昌典訳）「国家と革命――マルクス主義の国家学説と革命におけるプロレタリアートの任務」、江口朴郎（編）『レーニン（世界の名著 52)』中央公論社、1966 年、516-517 頁。

（3） 池田嘉郎『革命ロシアの共和国とネイション』山川出版社、2007 年、47，124 頁。

（4） 池田「スターリンのモスクワ改造」39 頁。

（5） 池田「スターリンのモスクワ改造」40 頁。

（6） А. Ф. Родин. Путешествуйте по Москве!（М.: Тончу, 2011）.

（7） 池田嘉郎「社会主義の都市イデア」、吉田伸之・伊藤毅編『イデア（伝統都市 1）』東京大学出版会、2010 年、226 頁。

（8） В. Паперный. Культура Два（М.: Новое литературное обозрение, 1996; First ed., 1985）

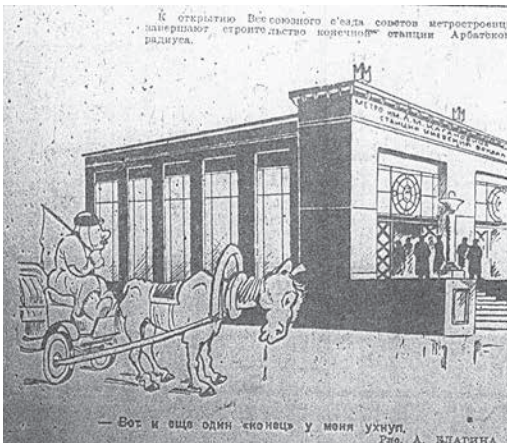
（9） Андрей Платонов. Счастливая Москва. Роман // Новый мир. 1991. No. 9. С. 29.

（10） 池田「スターリンのモスクワ改造」38 頁。

（11） 横光利一『欧洲紀行』講談社文芸文庫、2006 年、177，182 頁。

（12） 池田「スターリンのモスクワ改造」50 頁。

（13） 以下、アーカイヴ文書の引用は、池田「スターリンのモスクワ改造」41-42，46-48 頁。

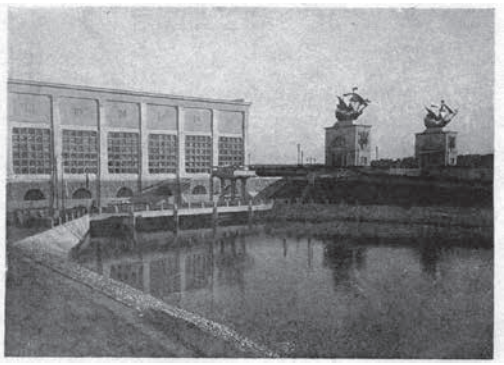


図版１　Вечерняя Москва〔『夕刊モスクワ』〕1936年11月23日 「全連邦ソヴィエト大会の開会にあわせて地下鉄工事労働者たちがアルバート線終着駅の工事を完成する見込み。」「また行き着く先を一つなくした。」

図版２　メリニコフ邸（1927-1929）（池田が2010年２月・３月に撮影）

図版３　人民委員会議ビル（現下院. 1932-1936）とトヴェリ通りの居住用ビル（1938-1939）（池田が2010年２月・３月に撮影）

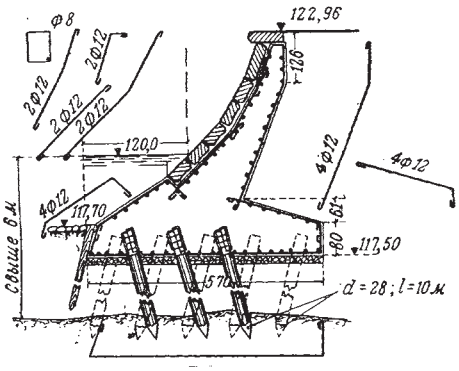
図版４　サドーヴァヤ通りの居住用ビル（出典 И. Романовский. Новая Москва. Площади и магистрали〔ロマノフスキー『新しいモスクワ：広場と幹道』〕モスクワ、1938年、85頁）



図版５　モスクワ＝ヴォルガ運河（1932-1937）（出典 Архитектура СССР〔『ソ連建築』〕1939年12月号、26頁）

図版６　モスクワ河の河岸、雀が丘（レーニン丘）の辺り（池田が2010年２月・３月に撮影）

図版７　雀が丘にそびえるモスクワ大学（1949-1953）（池田が2010年２月・３月に撮影）



図版８　河岸の構造（出典 И. И. Гольденберг и др. Набережные Москвы. Архитектура и конструкции〔ゴリデンベルグ他『モスクワの河岸：建築と構造』〕モスクワ、1940年、132頁）

図版９　ホテル・モスクワ（1933-1935）（出典　ロマノフスキー『新しいモスクワ』53頁）

図版10　再建されたホテル・モスクワ（2004年に旧館を撤去、2005年に再建開始。2011年に再オープン）（池田が2010年２月・３月に撮影）

図版11　モスクワ副都心（池田が2010年２月・３月に撮影）

図版12　メドヴェトキン『新しいモスクワ』（1938）「生きた模型」が示す改造後のモスクワの姿（出典　Москва в кино〔『映画の中のモスクワ』〕モスクワ、2008年、36頁）